イザベラ・バードの奈良紀行〈2〉

― 外国人旅行家がみた明治期の奈良 ―

中島 敬介
NAKAJIMA Keisuke

関西の旅と伊勢神宮参拝 ― 通過点としての奈良

《日本上陸》

明治11年（1878）4月1日、イザベラ・バード（1831―1904）は影響力のある日本在住者への40通の書簡と、風変わりな刺繍や装飾品の土産を抱えてエディンバラを出発した。ニューヨークからアメリカ大陸を横断してサンフランシスコに到着すると、5月3日、蒸気船「シティ・オブ・トキオ号」に乗船。18日間ずっと揺れながら陰鬱な雨の多い海原を航海し、5月20日の昼前には江戸湾(東京湾)を進んで横浜に上陸した。

日本の地に、大英帝国ヴィクトリア期の著名な女性旅行家イザベラ・バードの最初の一歩が、刻印された。

《伊勢神宮への旅》

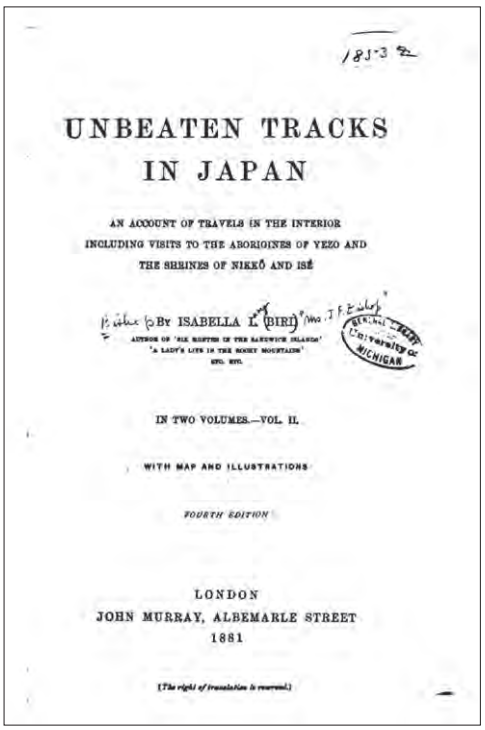
本稿では『*Unbeaten Trucks in Japan*』(『日本内地紀行』)における、現在の奈良県域内におけるバードの足取りと、そこで見聞された風景文物及びその感想をトレースしていく。『*Unbeaten Trucks in Japan*』を構成する書翰は全59通、奈良（大和）は最後近く、京都から伊勢神宮への「旅の途中」に現れる。

バードは東京に到着すると諸準備を整え、6月10日に日光を経由して北海道（蝦夷）に向かった。アイヌの人たちとの親密な交流の後、9月14日、函館から帰京に向けて乗船（兵庫丸、705トン／200馬力）するが、三陸沖で暴風雨に見舞われ、横浜に上陸して東京に戻ったのは、9月18日である。

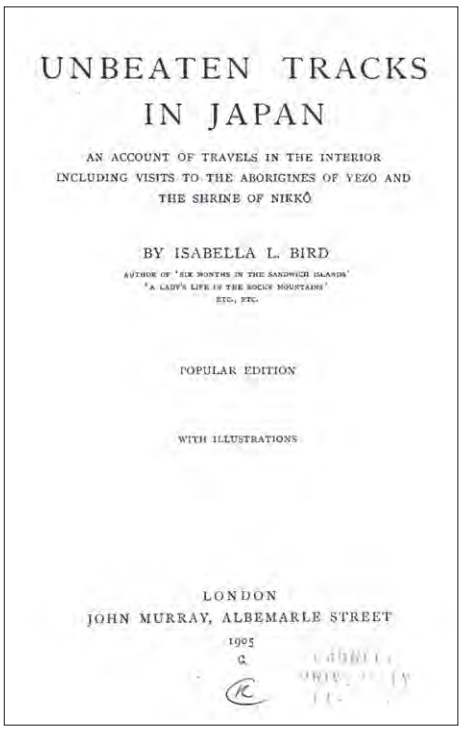
その後、ほぼ3週間東京―英国公使館と思われる―で寛いだバードは、10月11日に東京を出発、横浜港から神戸に上陸。有馬・三田を往復して神戸に戻り、そこから大阪・京都を経て、宇治から奈良街道を下って奈良。そのまま三輪に南下し、伊勢街道で長谷・宇陀の山中を抜けて、11月10日に伊勢神宮への参拝を果たした。

この往路1と月に及ぶ関西・伊勢の旅のうち、奈良滞在は明治11年（1878）11月5日～8日までの実質3日間、その足取りは次のとおりである。

・明治11年（1878）11月5日の朝、宇治を出発。
・同日の「晩」に、奈良の「宿屋」に到着。
・11月6日、現在の奈良公園あたりを見学（鹿、春日大社、東大寺、正倉院）。
・この日のうちに三輪に移動、大神神社の近くに宿泊（翌7日朝の可能性もある）。
・11月7日、初瀬（初瀬川、長谷寺）の美しさに感嘆する。
・11月8日、宇陀から名張へ、山中を「美しい景色を見ながら」移動。
・11月9日、伊勢国山田に入り、翌10日に伊勢神宮（外宮）を参拝。


UNBEATEN TRACKS
IN JAPAN
AN ACCOUNT OF TRAVELS IN THE INTERIOR
INCLUDING VISITS TO THE ABORIGINES OF YEZO AND
THE SHRINES OF NIKKÔ AND ISÉ
BY ISABELLA L. BIRD
IN TWO VOLUMES.—VOL. II.
WITH MAP AND ILLUSTRATIONS
FOURTH EDITION
LONDON
JOHN MURRAY, ALBEMARLE STREET
1881

Bird, Isabella Lucy. Unbeaten Trucks in Japan
『原本』


UNBEATEN TRACKS
IN JAPAN
AN ACCOUNT OF TRAVELS IN THE INTERIOR
INCLUDING VISITS TO THE ABORIGINES OF YEZO AND
THE SHRINE OF NIKKÔ
BY ISABELLA L. BIRD
POPULAR EDITION
WITH ILLUSTRATIONS
LONDON
JOHN MURRAY, ALBEMARLE STREET
1905

同書　『1885年本』

以下、かぎ括弧内の引用文は、特に註記しない限り、下記の文献による。ただし〔和訳〕については、故あってその一部を改変し、拙訳としている。また引用箇所は―引用対象とするページが一連で範囲が限られているため―逐一指示せず、その範囲を下記に一括した。いずれも諒とされたい。なお、当該箇所以外の引用については、巻末に掲示した。

・〔和訳〕：イザベラ・バード著／金坂清則訳注『完訳日本奥地紀行』第1巻～第4巻（2012，2013）平凡社東洋文庫（以下、『奥地紀行』）
・引用箇所：第4巻 第55報、pp. 109–128
・〔原文〕：Bird, Isabella Lucy. *Unbeaten Trucks in Japan: An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aborigines of Yezo and Shrines of Nikko and Ise*, vol. II, London, John Murray, 1881（以下『*Unbeaten Trucks*』）
・引用箇所：LETTER LV, pp. 253–270

《奈良街道のひどい宿》

明治11年（1878）11月5日午前8時、バードは「こぬか雨 a grey-brown dizzle」の京都を発ち、奈良に向かった。同行者は、アメリカン・ボードの宣教師夫妻（オラメルとアンのギューリック夫妻 Mr. & Mrs. Gulick）だった。

道中で見た伏見の家並みは「とても貧しそうな人々の住まい the dwellings of the poorest classes」だったが、「みすぼらしさも悪習（without）vice or squalor」も感じられず、まさに「清貧 industrious poverty」そのものであった。

家ごとに「大輪の菊の一輪立 one great, bulging chrysanthemum」が飾られ、休憩で立ち寄った「伏見稲荷大社の庭師も羨望のあまり取り乱す（such as would）drive Temple gardener wild with envy」であろうほどの見事さであった。

宇治に入り、何軒もの茶店が川（宇治川）に迫り出すように並んでいるのを見たバードは、「理想の茶屋という一枚の写真を見ることがあるとすれば、それはこの地の茶屋だと思ってよ（ゝ）（if you see）a photograph of an ideal tea-house, you may be sure it as at Uji」と綴っている。昼食をとった茶店の庭も「夢かと思うような峡谷が見え、眼下の小さな庭は紅葉した楓が真っ赤に輝いていた。非の打ち所のない理想の庭 over a miniature garden lighted by flaming maples. It was altogether ideal, and I felt that we were coarsely real and out of place!」との絶賛を惜しまない。

一方、天候は悪化の一方を辿る。

奈良が近づくにつれて雨足は激しくなり、バード一行は「二時間にもわたってずぶ濡れ after two hours of through soaking」で歩かざるを得なかった。あたりが「真っ暗な中を奈良へと急いだ（we were）hurried into Nara in the darkness」バードは、「最初の〈宿屋〉が目に入るや〈人力車〉を飛び降りて shot out of our kurumas at the first *yadoya* we came to」しまったのだが、「畳は古く、天井は低く、客が溢れ、悪臭 with old mats, low ceilings, a through of travelers, and end of bad smells」芬芬（ふんぷん）の、たいそう「ひどい宿（it was）a bad inn」であった。

「車夫たちももっと先まで行くつもりは全くなかった the men evidently not being minded to run farther」というから、予め決めていた宿屋ではない。バードの旅は「それぞれの地の最もよい宿に宿泊することを原則と」していたとされるが、この日以降の記述からすると、伊勢神宮までの行程は、そのような通常のバードの宿屋選定パターンからは、かなり逸脱したもののように思われる。

この夜は、ひどい豪雨に耐えきれず、後先も考えず目に付いた宿屋に飛び込んだのだろうが、記述の内容から推すと、ほとんど木賃宿の風情である。京都からのルートは「人のよく通る道 well beaten track」というから、奈良街道沿いの宿であろうが、詳しい地点も屋号も不明である。あるいは、まだ奈良には入っていなかったのかもしれないが、少なくとも「真っ暗な中を奈良に急いだ into Nara」との表現からすると、バードの主観としては「奈良で最初の宿」であり、この「ひどい宿（it was）a bad inn」が、バードとって最初の奈良体験となったのである。

《奈良のまち ―哀愁漂う、旧い帝都―》

この宿は「蚤も蚊も季節はずれでいない to realise the fact that fleas and mosquitoes are at end for the season」ことだけが救いであったが、それでも「すぐそばで人の気配がするのと、仲間の客〔車夫〕がみなごそごそとして寝なかったために寝られなかった we could not sleep for the closeness of the air and the general restlessness of our fellow-travellers」と愚痴るバードであった。それでも翌日（11月6日）になると、元気は回復したようで、生憎の「陰気な霧雨の一日だった a murky drizzle」が、「八世紀に七人の天皇が在位したこの旧い帝都の見物を楽しんだ I enjoyed the sights of the old imperial city, in which seven Mikados reigned in the eighth century」。

バードはそのときの印象を、次のように記している。

「この奈良については人は意見を異にする。私の知り合いにも、絶賛する人がいる一方でこき下ろす人がいる People differ about Nara. Some of my friends rave about it, other run it down」と。では、バード自身はどうかと言えば、その日は陰気な霧雨が降っていたが、「もやがかかっている時でさえ麗しい所だと思われた I thought it lovery even in the mist」と評価し、こう続ける。「自然の見事な美しさが、宗教建築や古代の哀愁漂う衰微と相まっていや増しているの

である。とても神々しくて目を惹きつける with great natural beauty heightened by religious art, and a grey melanchory of arrested decay, which is very solemon」と。

また「二万一〇〇〇人以上の人々が住むこの町（奈良）は、絵のように美しい低い山並みの裾野にそって広がり、最高の英国庭園をすべて集めたかのようなその［山の］森［若草山］からは、古代大和のすばらしい景色を見渡すことができる The town, which contains over 21,000 people, runs along the slope of range of picturesque hills, and from the forest, which in part resembles a collection of our finest English parks, there are magnificent vies over the ancient province of Yamato」。その日は「朝早くから出かけ、まる一日近くを費やしていろんな見所を楽しんだWe went out early, and spent much of the day.」のだが、「ただの遊覧というようなものではなかった I cannot say in sight seeing」とも書いている。なぜなら、「広大なすばらしい公園や森をなす山［若草山］に広がる見所の大半は、宗教と結びついていた enjoying the sights, nearly all of which lie in the magnificent park or forest on the hill, and are mostly connected with religion」からだ。

バードの関西旅行の目的の1つは、日本の宗教事情の見聞であり、最初の訪問地・神戸では「神戸［は］開港場というよりも伝道の中心と［思われ］私がここに来たのも、一つには伝道事業の進み具合を見るためだった Somehow when one thinks of Kobe it is less as a Treaty Port than as a Mission centre」※1と記し、京都では「同志社女学校 American Mission School for girles」※2や「同志社英学校the Kiyote College」※3を訪ね、京都市行政のキリスト教（徒）への扱いに疑問――と不満――を漏らしている※4。また、「仏教の数ある宗派やその分派にあって、私の関心を最も惹くのは親鸞が［…］創始し、時に門徒衆ともいわれる真宗であるOf many sects and subsects into which Buddhism is divided, none interests me so much as the Shinshiu, sometimes called the Monto Sect, founded by Shinran」※5と言い、赤松連城【註i】と宗教論を戦わせている。

そのときバードは、「（赤松連城は）キリスト教の研究者であるにとどまらず、深い思想家でもある――難解な思想家ではあるが。しかし、位階制のある仏教界きっての知恵者であり最も開明的だと見られているこの僧侶が、自らの形而上学と果てしなき輪廻転生の原理を本当に信じることができるのだろうか He has deeply studied one or two branches of our literature, and is evidently a deep, though a metaphysical, thinker, as well as a student of Christianity. Can this priest, who is regarded as the ablest and most enlightened man in the Buddhist hierarchy, truly believe in his own metaphysic and in the doctrine of prolonged metempsychosis ?」※6と、連城の見解に深遠な疑問を投げかけている。一方、奈良においては、そのような深みのある考察は一切なく、先に引用したように「すばらしい公園や森をなす山」と宗教との関連を言うのだが、それらがどのように「宗教と結びついていた」か等については――精神性も含め――全く言及していないのである。

《正倉院―異様なgodown（倉）―》

この日、とりわけバードが強く関心を寄せたのは「巨大な木造の倉［正倉院］Among the most curious is a monstrous wooden magazine, made of heavy timbers」であった。いや、この「ちょっと想像もつかないような、単調で洗練さのかけらもない代物 the most drearily uncouth building that can be imagined」それ自体に対してではない。この建物が「八世紀末［七八四年］に、奈良［平城京］から京都［長岡京］に遷る直前に造営され［…］天皇の調度品や宝物を安全に保管するため［に］六一年ごとに点検され、必要に応じて修理を施され【註ii】、今に至っているという it was built for the safe deposit of the Mikado's furniture and property, just before the Court quitted Nara to Kiyôto at the end of the eighth century, and is said to have been examined every sixty-first year since, and repaired when necessary」事実に対してである。

さらに、「もっと興味を惹かれる More curious still」のは、「時の経過による破壊作用を一〇〇〇年に免れてきたという事実と、八世紀の目録に記載のある品々がここに伝わり、後世の収蔵品とは容易に識別されているという事実 not only has a wooden building escaped the destructive agencies of a thousand years, but that the actual articles mentioned in the inventory of the eighth are there, and can easily be distinguished from later accumulations」に対してであった。

また、「少し前に博覧会が an exhibition at Nara not long ago」開かれ、そのときに展示された「複数の屏風や絵画、面［伎楽面］、書蹟、彫塑［白石板］、［…］円い石鹸石、銅の椀や皿、瑠璃や魚形、玳瑁製の「如意」、各一つの磁器とガラス器、袍や鈴、帽子、武具、種々の調度品、青銅の鏡、紙、陶磁器、木像等々［の］ほとんどはこの異様な「倉」に戻されている among the objects replaced in the monster "godown" were screens, pictures, masks, books, sculptures, soap in round cakes the size of quoits, copper bowls and dishes, beards and ornaments, tortoise-shell "back-scratchers" pottery and glass, dresses, bells, hats, weapons, and utensils of various kinds, bronzes, writing paper, clay statuettes, wooden statues, etc, etc.」と残念がるが、一方「今でもその正倉院の逸品のごく一部はこの大刹［東大寺］の裏で見ることができる【註iii】a few wonderful things from Imperial Treasury are still to be seen at the rear of great temple」との興味深いコメントも残している。

この「博覧会」すなわち「奈良博覧会」は、１８７５年（明治８）年に第１回が開催され、１８９４年（明治27）まで計17、８回―明治31年までとする新聞記事もある―開催されたと言われている。主たる目的は奈良の勧業殖産とされるが、古器旧物とりわけ正倉院宝物やその複製品も展示されて大評判を博し、その後の正倉院展の先駆けともなった。

１８７２年（明治５）からの京都での博覧会では、期間中「遊歩期（規）程」が緩和され、外国人の入京が許された―

というより、外国人に出品を求めるために積極的に開放された―が、奈良博覧会では同様の措置はとられなかったため、これに対する外国人の評価は、管見の限り、このバードの記述以外には見当たらない。

正倉院宝物には高い関心を示したバードだが、奈良公園の「鹿」については好印象を持てなかったようで「多数の聖なる鹿は、ここにあるいくつもの見ものの一つで、荘厳な杜や幅の広い道をうろうろし、煎餅を求めて人にしつこくついてくる Among the many interesting things are a number of sacred deer, which wander about the majestic groves and avenues, and follow one about greedily, begging for cakes, which their pertinacity compels one to buy」と、煩わしさを隠さない。

そして、奈良の土産物については「旅行者はだれもが神聖な鹿の絵や鹿の角で作った簪やお守り、櫛を買う。そして有名な春日神社に大挙してやってくる参拝者はこのお守りや簪を帯からぶら下げている Every one buys images of the sacred deer, hair-pins made from their horns, charms and combs, and the pilgrims, who come in great numbers to the famous Shintô temple of Kasuga, sling these upon their girdles」と記すが、バードも奈良土産としてそれら買ったかどうかは、分からない。

バードらは、奈良から三輪に向かうのだが、その日が「一日近くを費やした spent much of the day」とする11月6日の夕刻なのか、翌7日朝なのかは明記されていない。『奥地紀行』の訳注では「[5日の]夕方になってからオラメル・ギューリックがバードと妻と別れて神戸に向かったとは考えにくいことからすると、六日も奈良に泊まり、七日の朝に別れたと考えるのが自然」とするが、果たしてどうだろうか。バードらは6日の「朝早くから出か」け、見物先は「旧い帝都」と言いながら、ほとんど春日大社から東大寺のあたりにかけた、奈良公園近辺から出ていない。ほぼ、午前中でじゅうぶんな散策範囲である。

また、先の「ひどい宿」での記述には「それから後の宿屋は快適だった Since that night we have been incomfortable yadoyas」とあり、その夜も奈良で過ごしたとすれば、同じ宿屋ではあり得ない。バード自らの原則どおり、この地（奈良）の最もよい宿―例えば、Satowなら推奨したであろう「三笠山の麓にある絶景の宿」の武蔵野、あるいは奈良町の印判屋か小刀屋―に泊まったはずだが、その夜の宿の印象は、書き残されていない。同訳注では「九日の夜には〔伊勢〕山田に確実に入っているので〔…〕若干無理はあるが〔…〕夕方近くに奈良を出〔たと〕考えておく」と、苦しい解釈をしているが、そう悩むことなく、むしろ6日の午後には奈良を発っていたと解釈した方が、無理がない。

見物に費やされた「一日day」とは、「日中」くらいの意味であろう。

このような、些末などちらでも良さそうな旅程に拘わっているのは、一泊を要した見物にしては、神戸や京都と比較して、バードの記述が質・量ともに、余りにも薄いからである。

もう一泊して、奈良を旅しようとする意気込みは、微塵も感じられない。

神戸は外国人居留地の実態を知るための、京都はキリスト教普及の状況と日本の宗教を学ぶための、そして伊勢は日本文化の本質を探るための、各々の目的地であった。奈良では、それらに匹敵する目的が、一向に見当たらない。

奈良は、京都から伊勢に向かう順路の途中の―単なる―「経由地」に過ぎなかったのではないかと思える。

東京以東のルートでは、伊勢神宮への訪問（参詣）が最大の目的であり、その日程が最優先されたために、奈良での滞在が短くならざるを得ず、結果として旅行目的地とならなかったと考えたいところだが、そもそもバードが「日本を訪れることにした」のは、先に触れたとおり、「日本には目新しいことや興味をひくものが特別に多く」あり、日本は「私を有頂天にさせるというより、調査研究の対象になる国」で、「その興味深さは予測を遙かに超えるものがあった」からだと、本書の冒頭に記している。

どうやら奈良のまちには、バードにとって「目新しい」ことも「興味をひく」ものも多くはなく、旅人に楽しみや元気を与える要素にも乏しく、特に興味をひく土地ではなかったようである。なぜ、奈良県最大の観光エリアがバードを惹きつけなかったのか、今後検証すべきポイントの1つと思われる。

さて、そのようなデスティネーションから外れた―であろう―奈良見物のテンションの低さは、次の三輪にも引き継がれる。

《三輪の宿では「着こなし」談義と車夫の闖入》

三輪の宿については、「部屋からは神社巡礼［参拝］で有名な神社［大神神社］に通じる松並木が見えた。すばらしかった delightful accommodation […] with a fine view of an avenue of pine trees, which leads to a famous shrine of Shintō pilgrimage)」と、一応は記している。しかし、それは―たまたま―そういう見晴らしの利く部屋に通された、と言うだけのことで、それ以上に関心が深まらない。まして、大神神社への訪問（参詣）動機に結びつくものではなかった。

その後バードらは外出もせず、専ら「宿の女将と最初から大変和やかに打ち解け we are always in very sociable terms with our hosts」て、日本と英国の女性たちの間で「着物の着方 it did not look womanly or "correct" to wear t〔dresses〕as they do」に関する彼我の違いに花を咲かせ、この実にのどかな話題で盛り上がっている。

さらに、その華やいだ場に無粋な車夫が闖入し「畳の上に雁首揃えて正座し、深々と頭を下げ after prostrating themselves, knelt in a row on the floor」て、「周遊して京都に戻る一〇日間の旅に三人全員を雇ってほしい we would engage the three for the ten days, journey round to Kiyotō」と嘆願される―ほとんど旅行の趣旨とは無関係な―エピソードが挿入されている。その理由は『わしら〈もまた〉伊勢にお参りに行きたいんでさ！ We *too* wish to worship at Ise !』というだけの、なんとも締まりのないものだとバードは嗤うが、その記述だけで「哀愁漂う」ほどの「旧い帝都」の見物記を、遙かに上回る分量が割かれているのである。

あるいは、伊勢神宮に対する一般庶民の信仰を示す実体験のエピソードとして描こうとしたのかもしれないが、それならば特別に稿を立てた「伊勢神宮に関する覚書」で扱われるべきで、ここでは、車夫が仕事ほしさの口実に持ち出した、座興めいた―そして見事なまでに緊張感を欠いた―エピソードの扱いを超えるものではない。

記述のボリュームだけで比較すれば、奈良のまちは、そして三輪も、粗野な車夫の浅知恵ほどにも評価されていなかったのである。

（以下、次回に続く）

イザベラ・バードの肖像と自筆
Stoddart, Anna M. The Life of Isabella Bird (Mrs. Bishop), London, John Murray, 1906, より

【引用参考文献】
※1 (1) 本文掲示〔和訳〕p. 65
(2) 本文掲示〔原文〕p. 214
※2 同、p. 79／p. 226
※3 同、p. 79／p. 227
※4 同、pp. 79-81／pp. 227-232
※5 同、p. 90／pp. 236
※6 同、p. 102／pp. 246
※7 (後述【註iii】中)Satow, Ernest mason & Haws. A. G. S. *Hand Book in Travellers in Central & Northern Japan.* Yokohama, Kelly & Co, p. 348

【註i】赤松連城(1841—1919) 浄土真宗本願寺派僧侶。イギリスに留学し、教育制度を学んだ。島地默雷とともに、政府の大教院設置を廃仏政策として反対した。後に仏教大学(現在の龍谷大学)学長を務めた。

【註ii】正倉院が、61年ごとに点検されてきたことを示す根拠は、見当たらない。『正倉院整備記録 本文編』(宮内庁、平成27年)では創建以降の正倉に関する修理記録(及びその可能性を示す出来事)を20数回としている。江戸期には点検及び修理が3度行われたとするが、いずれも東大寺からの要望または奉行所からの願い出があったからで、定期的点検ではなく損傷に係るものと見られている。正倉院(正倉)の管理は江戸期まで一貫して朝廷の監督下で東大寺が担っていた。明治期に入ると扉の開閉については宮内省、宝物・正倉の管理所管は内務省(明治8年)、農商務省(明治14年)、宮内省(明治17年)と移った。バード来寧時は農商務省の専管であった。

バードが記した正倉院の点検云々の情報源は分からない。あるいは「歴史分野の最高権威」と帰化されたアーネスト・サトウ(後述)からもたらされたかもしれないが、彼の日本見聞記(後述)には正倉院は記述されていない。

なお、正倉院宝物が初めて撮影されたのは明治5年の「壬申調査」による8月12日の開封時。この調査は、古器旧物の保存と海外流出のために社寺・華族の所蔵品を対象とする本格調査で、同年開催の文部省博覧会への出展品の考証に備えるためのものだった。

【註iii】バードの記述どおり、博覧会終了後も、一部出展品については—東大寺の裏ではなく—大仏殿内で「常設展示」されていた。ただし、その展示品に正倉院宝物が含まれていたかどうかは、分かっていない。バードも Imperial Treasury are still to be seen と言うだけで、実見したとは記していない常識的には博覧会後に正倉に戻された、と考えるのが妥当だろう。

なお、博覧会そのものに関してではないが、アーネスト・サトウ—当時、英国公使館の書記として、バードの旅程や日本に関するさまざまな知識を提供した—は1881年出版の著作で、「奈良には骨董商が多いが、二、三年前に当地で開かれた博覧会の際には大勢の人がやってきて価値ある正真正銘の古物のほとんどが購入され持ち去られてしまった Curiosity dealer around in Nara, but the Exhibitions which were held there a few years ago attracted many visitors, who purchased and carried away most of genuine antiquities of real values」※7との、これもまた、興味深い「事実(?)」を記している。